

-サンプルボイス（ボイスサンプル）の作成について-

俳優（声優）・ナレーターなどはクライアント（顧客）に対して「自分の声」のサンプルを制作することが多くあります。サンプルボイスは「声の仕事（声のプロ）」を目指す人にとっては、最初で最大の「営業ツール」と言えるでしょう。当然、そのような事情を考慮するとサンプルボイス（ボイスサンプル）の本来の目的は下記のように言えます。

自分の声質（声色）・表現・技術^{マネージャーや演出}をクライアントに知ってもらおう

最近、以上のような本来の目的ではなく「自分の趣味を知ってもらおう」という間違った解釈に基づくサンプルボイスを制作している人がいます。アニメ好きの人や、いわゆる「中二病」と呼ばれる、現実逃避あるいは自分を過大にあるいは過小に評価した虚構の世界を好む人にそれは多いように思います。

プロの「声優」や「ナレーター」を求めているクライアントが、そのような「趣味人」を求めることはありません。

クライアントや**この業界は「趣味人」ではなく「プロ」を求めている**のです。

以上のような原則を踏まえて、「サンプルボイスの制作方法」について解説してまいります。

原則として、所属事務所などに原稿を提出する前提で述べます。

令和2年6月9日

岩鶴恒義

<目次>

【原稿について】

縦書きと横書き

文字

原稿のフォーマット

ファイルの長さ

【表現について】

一文が長くならないように心掛ける

固有名詞に気を付ける

映像的文章にならないように注意

差別、誹謗、中傷してはいけない

数字はあまり用いない

漢語を避ける

主語と述語を明確にする

著作権(引用と流用、盗用の違い)に注意する

内容による表現の違いを出す

【構成について】

【原稿について】

やはり「原稿」は必須です。録音の際にも便利ですので、面倒ですがやはり原稿を作成しましょう。

その際の大原則は「自分で書いたオリジナルである」ということです。これは、既製の文章には原則として「著作権」があるためです。逆に言えば、自分で書いたサンプルボイス原稿にも厳密には「著作権」が発生します。自他の著作権を侵害しないためにも原稿は自分で書きましょう。

またサンプルボイス原稿を自分で書けない程度の「言葉に対する意識の低さ」なら、「言葉の遣い手」（俳優、声優、ナレーター）になるのは諦めたほうがいいでしょう。

●**縦書きと横書き**

特に指定されない限り縦横どちらでも構いませんが、もし

指定されている場合はその指示に従って書きます。ワープロでも手書きでもいいのですが、「400字」（一般の原稿用紙と同じ）を基準にすると時間の目安になります。というのは、400字を50～60秒で読むとニュースアナウンス程度の読みのスピードで、その1.5倍、すなわち75秒から90秒で読むと「朗読」や「ゆったりしたナレーション」の早さになるからです。

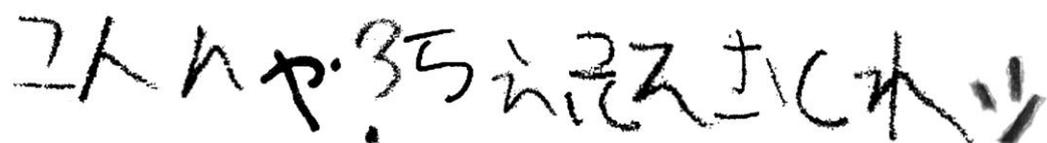
そのサンプルボイスの種別（アナウンス、ナレーション、朗読など）によって読みのスピードを割り出す基準になるのが「400字」だということです。

●文字

ワープロならば一般的な明朝体、あるいはゴシック体がいいでしょう。特殊なフォント（ポップ体、手書き風）などは使わないほうがいいと思います。また文字の大きさも10～12くらいの大きめ、かつ誰でも読みやすいフォントサイズにしましょう。

問題なのは「手書き原稿」を作成するケースです。私は指導上、「一文字ずつ石に刻むように丁寧に書きなさい」と指

導しますが、最近はかなり字の乱れた原稿を目にします。

Handwritten Japanese text in black ink on a white background. The text is written in a cursive, somewhat messy style. It reads: ユ人hか35 (判読不能) 六え±し (わorれ) ツ. The characters are somewhat distorted and difficult to read, especially the middle part.

いかがでしょうか。自分では「ちゃんと書いているつもり」の文字です。私は上記を左から「**ユ人hか35**（判読不能）**六え±し**（わorれ）**ツ**」だと思いましたが、文脈を辿らないと判別できず、ゲシュタルト崩壊を起こしそうでした。

もちろん「自分の声を録音する」のですから、「自分だけが読めればいい」という考えの人もいるでしょう。しかし、原稿は事務所側がチェックしますし、録音スタジオにはエンジニアや演出などもいて、その原稿をチェックします。「他者に伝える」というのは表現者にとっての大原則ですし、「他人を思いやる」という想像力も我々には不可欠な能力です。

「ていねいに、わかりやすく、ききやすく」を意識しましょう。

ちなみに上図は下記の文字だそうです。

こんんや？ら えこそさとれシ
と

●原稿のフォーマット

これは所属事務所によって異なりますので、指示されたフォーマットを守るようにします。フォーマットの一例を挙げておきます。

- ①所属事務所名～
- ②「自分のフルネーム」です～
- ③ファイルタイトル～
- ④本編～
- ⑤「自分のフルネーム」でした

事務所によっては、①はそのタレントのサンプルボイスの冒頭だけにするところもあります。また⑤は言わない事務所もあります。逆に事務所によってはどのファイルにも①、⑤をつけるところもあります。

また①～⑤までの「～」は1～2拍空けます。何点か注意すべき点を挙げておきます。

①所属事務所名と②自分のフルネーム(⑤も含む)

これは「ゆっくり、はっきり」を第一にします。サンプルボイスでキャストイングする場合、ごく少数の候補者しかない場合はじっくり聴いてもらえることもありますが、候補者が多い場合はサンプルを聴くだけでも時間がかかりますので、「名前を聴いただけで、ある程度判断する」ことが多いのです。①や②をいい加減にしている人に対しては「きっと仕事もいい加減だろう」という判断をされてしまいますので、注意が必要です。

③ファイルタイトル

原稿の内容にもよりますが、本編(④)だけでは内容が伝わりにくいケースがあります。下記の例(セリフ)をご覧ください。

【例】

ああ、あれね？ どうなった？ おお、そうかそうか、じゃ、それで…あ、ちょっと待って。はい、ええ…あ、わかりました。はい、伝えておきます。あ、もしもし、それ、悪いけど保留にしといてくれない？

※「もしもし」を入れることで電話での会話だとわかり、それは良いのだが、そのこと（電話での会話）がわかるのは後半になってからなので、効果としてはやや弱い。

いささか場面を想像しにくいでしょう。でも、ファイルタイトルを「**セリフ・オフィスにて**」にしておくと、聴き手はまずこれから聴くセリフの「設定状況」を把握できます。つまり「タイトルを明確にすることで聴き手に場面を想像させる（映像化させる）ことが出来る」ので、これだけでずいぶん効果的になりますし、聴き手にも親切です。

④本編

上記のセリフは「映像的」な内容です。つまり自分だけが「どこで」「誰が」「どんな話を」「誰と」しているか、そしてそこにやって来た人が「誰で」「何を言ったか」という「映像」が頭の中で出来あがっているのです。しかし、聴き

手にはそれらが分かりません。（それを補うためにも「タイトル」は重要なのです）

サンプルボイスでは原則としてS E（効果音）などは使いませんので、できるだけ「映像的」（映像がないと場面が想像できない状態）にならないように注意しなければなりません。これは「ボイスドラマ」などを作る時にも重要です。

声のみの表現スタイルでは【映像的】にならないよう注意する！

●ファイルの長さ

そのタレントの総持ち時間は事務所が決めているので、もちろんそれに従います。ただ「持ち時間いっぱいにならなければならない」ということではありません。「持ち時間以内に収める」ことが重要です。

さて、様々な表現スタイルを披露したい気持ちもあるでしょうけれど、1ファイルの長さ（尺）は、30秒程度に収めたほうが良いと思います。あまりに長いと逆効果になりますので注意して下さい。

[目次に戻る](#)

【表現について】

●一文が長くならないように心掛ける

この解説自体がそうなのですが、よく見ていただくと、私の書いた文は、ほぼ1行から長くて2行程度です。一文は短いほうが読みやすいし、聴きやすいのです。

ときどき「ワンプレスで長い文を読まなければならないのですが、どうしたら良いか」という質問を受けます。最終的にそれは「その文が悪い」ということは間違いないでしょう。そういうことを踏まえて、あなたの書いた一文があまり長くなるようなら二つの文に分けられないか^{すいこう}推敲してみてください。

●固有名詞に気を付ける

サンプルボイスは多くのクライアントが聴くものですから、「固有名詞」（地名、人名、会社名、団体名）などについては注意を要します。例えばA社のCMナレーションを制作するのに、候補タレントがA社と同業のB社の商品名を言っていたらマズイでしょ？

できるだけ架空の固有名詞（それも、聴いて分かりやすいもの）にしたほうがいいでしょう。

人名で言えば、最近多いキラキラネームと呼ばれるものでも、聴いて分かり易ければ良いと思います。例えば「未来」を「ミライ」と読むと人名なのか「将来」のことなのか分かりにくいと思いますが、「ミキ」とか「ミク」くらいまでなら人名だと理解されるでしょう。

商品名では「コーラ」「ビール」は一般名詞ですが、「○
○・コーラ」や「○○○・ビール」などと言うと問題があります。

自分で作ったヒーロー名とか、敵役の名前とか、必殺技名は、まず聴いて理解されません。 趣味を生きるのか、「仕事をめざす」のか考えましょう。

●映像的文章にならないように注意

これは先述した【原稿について】～原稿のフォーマット～③と④でも述べましたが、「聴き手が音だけで場面を想像できる」ように書くということです。特に「セリフ」などでは気を付けないといけません。

どうしてもそんな「映像的」なシーンのセリフを書きたいならば、ナレーション部分も入れてその「セリフ」を書くと良いでしょう。

●差別、誹謗、中傷してはいけない

言うまでもないことですが、差別的な内容にならないよう、他者の悪口を書かないよう、傷つけないように注意しないとはいけません。最近はその言葉を用いるのに適切かどうかはネットでも調べられるので、迷ったらまずは調べる努力をしましょう。

●数字はあまり用いない

数字が聴こえると人間はそこに相当集中してしまいます。ましてや「〇〇年〇〇月〇〇日、午前〇時〇〇分ごろ」などというような表現は絶対に避けるべきです。

「3つのお願い」とか「2人組が」とか「たった一人で」くらいなら想像しやすいでしょう。認知されている数字（40人の盗賊、十二人の弟子、三千院、億万長者、1千万都市、100万ドルの夜景）などは問題ないと思います。

「その日、5時22分からの戦いでは21,279人の将兵の内、2,311人が戦死、負傷者数は10,107人に及んだ」

これでは聴くのを放棄してしまいます。サンプルボイスは「聴く物」であって「読む物」ではありません。また「映像」もないのですから**「音だけでわかってもらえる」**ことを意識してください。

●漢語を避ける

漢語（音読み）は「聴いてわかりにくい」のです。

たとえば「カンソウ」という言葉は「乾燥」「感想」「間奏」「完走」「歓送」「換装」などいくつも意味があります。

「カワイタ」と言えば「乾いた」だと比較的すぐに理解できます。「走り切った」なら「完走」だとわかります。このようにできるだけ和語（訓読み）を使うようにしたほうがいいと思います。

そういう意味でも「漢語」の多い「中二病アニメ的な内容のセリフ」はサンプルボイスに不向きです。ただ、「世間に広く認知されている漢語」ならば使っても差し支えないでしょう。

【例】水道(スイドウ)、電車(デンシャ)、地下鉄(チカテツ)、飛行機(ヒコウキ)、電話(デンワ)、土地(トチ)etc.

をさもオリジナルだと思わせるのは盗用です。絶対にやらないようにしましょう。

著作権の消滅した文章（小説など）は、「青空文庫」にもありますので、「朗読」というファイルを作りたいならお調べになってはいかがでしょうか。ただし、「漢語」には注意しましょう。

また、小説（朗読）文体でも、CM文体でも、世間に類型的に見られる**「文体を参考にする」**のは問題ないでしょう。

●内容による表現の違いを出す

多くの人が複数のサンプルボイスファイルを制作することでしょう。「ナレーション」「セリフ」「朗読」あるいは「歌唱」なども作ろうとするかも知れません。そしてさらに「ナレーション」なら「番組ナレーション」「CMナレーション」「VPナレーション」などと細分化したり、「セリフ」も「時代劇風」とか「〇〇屋の売り声」とかになるかも知れません。

私は自分を含めて、今まで多くの俳優（声優）、ナレーターのサンプルボイスの制作現場や仕事の現場に立ち会ってきました。実に様々な人がおりましたが、その中で記憶に残っ

ている人を3人挙げておきましょう。

できていないのにできているつもり…技術と自己分析の甘さの問題

声の仕事ではいわゆる「キャラクターボイス」というジャンルの「特徴的な声」を要求されることがありますが、ある女優はひとつのセリフでこの「演じ分け」をやりました。しかし、全然その違いが表現できていませんでした。これでは「この人は不器用だな」と思われてしまいます。

「できているつもり」の多くは「できていない」ものなのです。同じような例で「捲きナレーション（早口）」をサンプルにした人もいましたが、やはりこれも滑舌が悪くて「何を言っているのか、意味の上でも発音の上でもわからなかった」ので、クライアントに対して逆効果です。

原稿を書けないので他人に書かせようとした…職業倫理(プロ意識)と表現力の問題

冒頭にも述べましたが、「自分で原稿を書けない」という言語表現レベルではこの仕事（俳優、声優、ナレーター）は無理でしょう。また「お金を払うから書いて」ということには仕事に対する誇りのなさを感じます。

また別な人の例ですが、自分の受け持ったMC（司会）の仕事で原稿を用意して来ていない人がいました。通常、MC原稿というものは主催者が用意するのですが、それがない場合はイベントMC側がしゃべる内容を自分で用意して来ます。主催者と打ち合わせをしたり、出演者から聞き取りをしたり、関連する事項を自分で調べたりします。さて、このMCは、あろうことか他のMCがオリジナルで作ってきた原稿を丸写しにして仕事をこなしました。これは窃盗です。

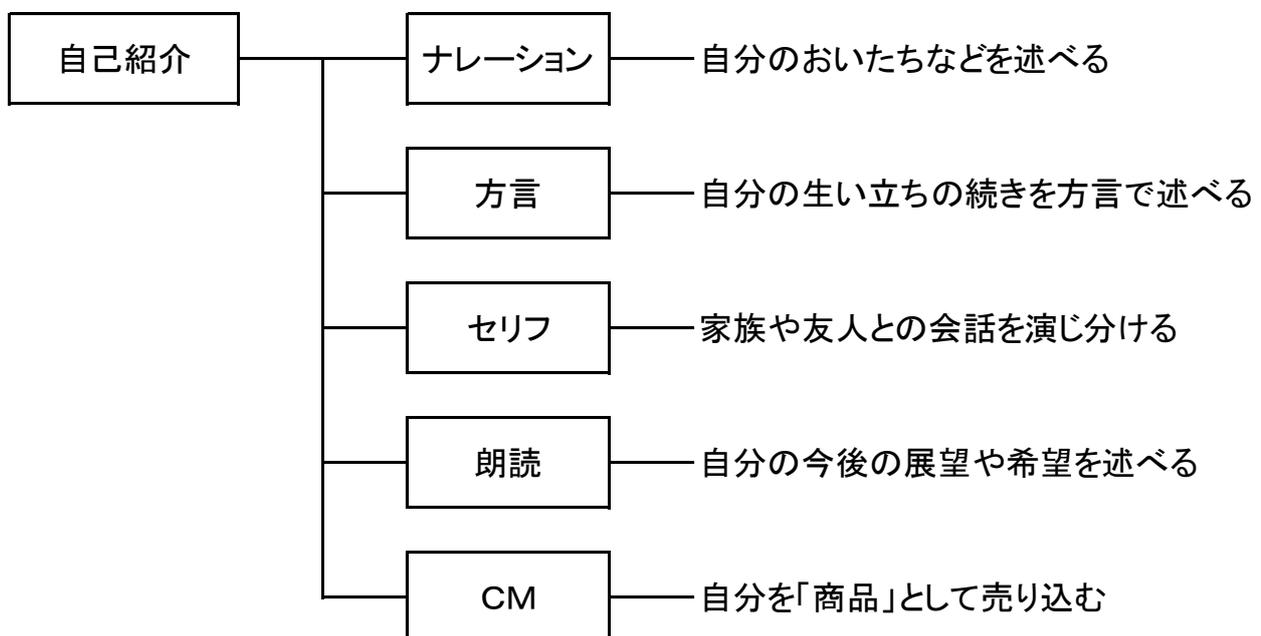
サンプルボイス原稿を盗作か？…人格と意識の問題

ある新人タレントは「外郎売」の暗誦が得意でした。実に淀みなく最後まで暗誦します。さて、そのタレントはサンプルボイス制作現場で、「それなら」という言葉がうまく発音できず、どうしても「ソネナナ」になります。自分の書いた原稿で、しかもリテイクする時間的余裕のない現場でこれだけ「咬む」のは予習不足か、「自分の言葉ではないもの」だからです。おそらく後者でしょう。

[目次に戻る](#)

【構成について】

さて、この説明の冒頭にも書きましたが、サンプルボイスというのは「声質・表現・技術」を披露するのが目的ですから、最初は「スタンダードな読み」のものを配置した方がいいでしょう。すなわちその人の「基本的音声」をまず聴いてもらいます。それから「セリフ」「朗読」と続ければ良いのではないのでしょうか。しかも**「オリジナルでないといけない」という大前提**がありますので、私はよく「自己紹介を原稿にきなさい」と勧めます。



これで5つのファイルが出来あがります。1ファイル30秒として2分30秒ですから、名前クレジットを入れても、

およそ3分以内で収めることができます。

さて、長々とどくと書いて参りましたが、サンプルボイス制作にあたって何かの参考になっておれば幸いです。

「自己紹介をサンプルボイス原稿にする」ということは有効だろうと思います。いずれの事務所でも毎年と言って良いくらいサンプルボイスを制作しますが、それでも「自己紹介」できる内容は年々増えて行くはずですし、そうやって書きなれていけば、いずれ「自己紹介」をあまり意識しなくても様々なサンプルを書けるようになると思いますので、初心者のかたはぜひお試しく下さい。ただし、タレント全員が「自己紹介」を基にしてしまうと、同じ構成になってしまい、「事務所のフォーマット」だと解釈される可能性もありますので、その点は注意を要します。

いずれにしても求められるのは「その人の声質と表現と技術」です。

変わったことをやろうとする必要はありません。「変人」を求めているわけではありませんから。

笑わせようとしなくても大丈夫です。サンプルボイスで笑わせられるのは相当な実力者です。

「得意なもの」をやらなくても良い。得意だと思っていることほど他人の評価は低いものです。

その場しのぎの技術でごまかしても、現場に出たらボロが出ます。いかに「現在の自分の力量に向かい合うか」が大事です。そして何より忘れてはいけないのが、

聴いてもらわなければ意味がない

ということです。

ひたすら勉強と練習を積まれることをお祈りいたします。

岩鶴恒義

[目次に戻る](#)